O4-5 ベビーセンターから退院となる医療的ケア児の特徴と作業療法の有用性

○井澤 ありさ（OT），村岡 莉帆（OT），大西 伸悟（PT），大久保 真里香（RN），
森沢 猛（MD），米谷 昌彦（MD）

地方独立行政法人加古川市民病院機構 加古川中央市民病院

Key word：NICU，医療的ケア児，退院支援

【背景】医学の進歩を背景に，ベビーセンター（以下，B.C）退院後，継続的に医療的ケアが必要となる児の数はここ10年で2倍以上に増加したと報告されている．一方で，それらの児に対し B.C 入院時から自宅退院を目的とした作業療法の介入に関する報告は少ない．

【目的】当院 B.C での入院を経て自宅退院する医療的ケア児に対する作業療法の有用性について後方視的に調査したので報告する．

【方法】対象は2015年4月から2017年12月に当院 B.C に入院し，自宅退院となった医療的ケア児5名．調査は，診断名，気管切開と胃瘻造設の有無，持ち帰り物品の有無，移乗練習介入時の児と家族の様子について診療録より後方視的に行った．

作業療法士が介入する移乗練習では，ベビーカーとチャイルドシートの種類，ポジショニング，医療的ケアの種類と頻度，呼吸器離脱可能時間，自家用車の種類，同乗者の有無の項目について症例毎に評価し，家族と一緒に実施した．必要に応じて自家用車まで同行し物品の設置場所を確認した．自宅の様子については，両親への口頭による聞き取りや退院前訪問に行った看護師からの申し送りと写真にて情報を得た．

本研究は，加古川中央市民病院臨床研究審査委員会での承認を得て行っている．

【結果】対象となった医療的ケア児の背景は，症例1：女児，帽状腱膜下血腫，低酸素性虚血性脳症，症例2：男児，21トリソミー，心房中隔欠損症，症例3：男児，低酸素性虚血性脳症，症例4：女児，13トリソミー，先天性心疾患，症例5：男児，18トリソミー，心房中隔欠損症であった．気管切開と胃瘻造設は症例1，2，5の3例で施行された．持ち帰り物品は，人工呼吸器は症例1，2，5の3例，酸素ボンベは症例3を除く4例，吸引セットと SpO_2 モニターは全例であった．全例において，頻回な吸引や SpO_2 低下など呼吸的リスクが高く，症例4には運転手以外の同乗者がいなかったため，児の観察と吸引ができやすいよう工夫を要した．

移乗練習開始直後の家族の様子は，人工呼吸器の回路の付け替えや児の抱き上げなど，移乗するための手順について戸惑いが多かった．そのため，機器の特徴と移乗の安全性について家族に説明し，理解できるまで練習を行った．全例で自宅退院までに家族が移乗方法を理解し，入院中から看護師に頼らず児の移乗を行えていた．退院日が近づく家族から自宅退院への不安の声も聞かれたが，家族と一緒に手順を再確認することで，不安は改善された．

【考察】当院 B.C から退院となる医療的ケア児は，移動時や在宅での呼吸管理に難渋していた．在宅での医療的ケア児における呼吸管理は，人工呼吸器・吸引器・酸素ボンベ・パルスオキシメーターなど物品が増えやすい傾向にある．また，経管栄養は児の移動を伴わないため，手技の獲得は家族にとって行いやすいが，ベッドやベビーカーからの移乗は物品の移動と児の移動の両方が必要となるため，家族で実施可能になるまでには時間を要しやすいと考えられる．また，長期入院を経て病院から在宅へ生活基盤を移行させることも児や家族にとって大きな転機となるため，家族の不安が増幅しやすい．当院では，B.C 入院時より作業療法士が児や家族に関わるため，児と家族の状況を理解した上で，必要な時期に繰り返し移乗などの ADL 練習や環境調整が行え，円滑な自宅退院へと繋げられやすいと考えられた．

【結語】当院 B.C から退院となる医療的ケア児の退院支援では，家族の不安が増幅しやすいため，児への介入だけでなく家族の不安軽減に向けて，早期からの作業療法士の介入が有用であることが示唆された．